

シリーズ 私の一冊の本

薬学部 野口博司 先生

レオン・R・カス(Kass, Leon)著

『生命操作は人を幸せにするのか: 蝕まれる人間の未来』

閲覧室 2 階 490.15/Ka 78 日本教文社 出版
自由閲覧室 推薦図書

ブッシュは「受精卵を破壊する研究に税金を使ってはならない」として、難病治療に役立つといわれる胚（はい）性幹細胞（ES 細胞）の研究規制を強化しようとする「派」の主であり、著者はその設置した大統領生命倫理委員会委員長である。しかしこの書で彼の提起している題名の問題とそれに立ち向かう著者の態度は、ブッシュのような単細胞的、汎アメリカ主義的、キリスト教右派的なものではなく、また日本の一部の有機栽培農家の「ためにする」遺伝子組換え反対でもなく、アメリカの良心の一方を代表した紳士的かつ真摯なものである。文系の学生は最低一般常識として読んでおいて欲しいと思うが、薬学部の学生のように生命操作に熟達することが当然の立場の学生も、それだけに世の中にはこういう立場の人間もいるということを知るうえで有用であり一読に値する。

小生は、一日本人として、この書的前提となっている個人主義や魂の尊厳の問題など、「考えたくも無い」。多くの人々の原初的な助かりたい欲求を妨げ、或いは洗練するというより、「不死を売る人びと」「夢の医療」とアメリカの挑戦」 スティーヴン・S. ホール著 松浦俊輔訳 阪急コミュニケーションズ、にあるような治療を少しでも多くの人々に享受できるように努力したいと思う。

このような問題の背後にある技術革新を知るにはジェームス D. ワトソン 著 アンドリュー・ベリー 著 DNA 青木 薫 訳、講談社刊。（文庫版あり）がよい。「現実のものとなっている遺伝子操作技術が、遺伝子組み換え農作物や塩基配列特許、DNA 鑑定等、今や我々の生活に密接に関わり、企業や国家に難しい問題だからとゲタを預けて済む問題ではなくなっていることを良く理解させてくれるし、そこまで至った生命操作の技術史が分かりやすく述べられている」